論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号

氏　　名　　永井　真平

論 文 題 目

折口信夫の「性」と「政」――「折口像」の問題

論文審査担当者

主査　名古屋大学　教授　坪井秀人

委員　名古屋大学　教授　阿部泰郎

委員　名古屋大学　准教授　日比嘉高

委員　和光大学　教授　村井　紀

論文審査の結果の要旨

［本論文の概要］

本論文は、折口信夫の創作と民俗学・国文学研究・批評を、折口の同性愛者としての性的同一性、都市知識人としての自己同一性の視点から考察し、性や政治をめぐって折口が論じられる過程で、固定的な〈折口像〉がどのようにして構築されてきたかを検証することを目的としている。本研究は序章・終章を別に全８章より成り、三部に構成されている。この中には学術雑誌に掲載された審査付き論文が２篇含まれる。

第一部「「折口像」を生み出すもの」では、評伝や創作の中に構築されてきた〈折口像〉について、同性愛者としての折口のセクシュアリティに関わる議論を整理しながら考察している。第一章では加藤守雄『わが師折口信夫』を分析し、同書が描く〈折口像〉が折口の同性愛的欲望と加藤自身の同性社会的欲望を暗示するものと捉え、そこから同性社会の問題に対する批判を抽出している。第二章では穂積生萩『信夫とひでの孃子塋』を取りあげ、折口の周縁にいた〈女〉弟子の穂積の言説から、加藤ら〈男〉弟子たちが作り上げた〈折口像〉に対する抵抗を読み取っている。第三章では大塚英志の『木島日記』の中の虚構化された〈折口像〉を分析し、そこに安藤礼二らによる〈折口像〉を批判的に克服する可能性を読み取っている。

第二部「「性」なる「折口像」」では、折口の「死者の書」「身毒丸」「口ぶえ」という３つの小説を取り上げ、その表象の分析を通して性に関わる〈折口像〉について検討している。第四章では折口の長編小説「死者の書」を分析し、性と死者の蘇りの主題的関わりについて典拠となった『埃及死者之書』と『穆天子伝』の持つ役割について特に後者のそれを重視する立場から安藤礼二などの論説を批判しながら論じている。第五章では「身毒丸」を説話「龍女成仏」に基づいたテクストとして捉え、邪淫の性としての女性、そして男子へと変成する女性が共存する、折口の両義的な女性観について検討している。第六章では同性愛を告白した自叙伝として読まれてきた「口ぶえ」を、初出紙『不二新聞』や関連するメディアと同時代言説および古典作品の典拠との関わりをもとに再配置し、宮武外骨や南方熊楠、田中香涯らの論説を参照比較しながら読解している。

第三部「「政」なる「折口像」」では、折口が同時代の社会問題にどのように対峙していたのかを詩歌の創作や国学・国文学研究の言説の分析をもとに検証している。第七章では、〈守矢豹司〉の名で発表された農村詩を分析し、〈みことのもち〉の概念を考察することで、農村恐慌の状況下で、農本主義的ファシズムに対抗する可能性をも措定しながら折口が〈農〉というものにどのように向き合ったかを論究している。第八章では、国学から国文学への学史的系譜を整理しながら、折口による〈新国学〉の提唱について、国学と国文学との対抗的な枠組みや、二・二六事件などのテロルとの関係についての従来の評価を再検討することを通して考察し、同時代の政治思想や学問の状況に対する折口の姿勢の二重性を明らかにしようとしている。

論文審査の結果の要旨

［本論文の評価］

折口信夫は自身の創作および民俗学・国文学研究の中に性に関わる主題を取り込んでいるが、これまでの研究は、それを彼自身が同性愛者であることに還元して説明することも少なくない。折口については池田弥三郎・加藤守雄・岡野弘彦ら主として彼の男性の弟子たちによってその人物像がある種伝説的な形で形成され、伊勢清志や辰馬桂二、藤無染といった男性たちそして晩年に養子として入籍させた藤井春洋との関係など、折口の同性愛者としてのセクシュアリティがその作品・研究・批評に反映していると捉える富岡多恵子や安藤礼二といった人々による言説が近年において大きな影響力を持つに至ったと言われている。本論文は〈折口像〉の形成を再検証するという立場から、直系の男性の弟子たちによる言説のみならず、安藤の批評をもそれらの〈同性愛的師弟関係〉を特権化した〈折口像〉を補完するものとしてきびしく批判し、同性愛的欲望と同性社会性とが連続し環流することで異性愛主義的な権力の構造を反復してしまうと論じる。理論的な観点から言えば、これは近年のジェンダー批評が前提とするホモソーシャル連続体という概念を踏まえつつも、(連続体の分断がホモフォビアを導くとする）それとは異なる（連続性こそが男性中心主義を強化するという）批判的モデルを提示している点において、何よりも注目出来る。

本論文の功績の一つは〈折口像〉を本質主義的な実像化の過程に生起するものと捉え、そこから折口の創作と折口評価を解き放った点にある。そのため、上記のような〈連続体〉の視点から批判的に読みかえる加藤の『わが師折口信夫』や、反復固定化されてきた折口の〈女嫌い〉の言説を相対化する可能性を探り出す穂積生萩の『信夫とひでの孃子塋』など評伝的な著述が取り上げられるばかりではなく、大塚英志の原作をもとに様々なヴァージョンが存在する『木島日記』のようなテクストも分析の俎上に載せられることになる。虚構化の中で同性愛の領域に画一化された〈折口像〉を多様なものとして書き換える大塚の企図を継承発展させることで、本論文は伝説化されてきた〈折口像〉を虚構の力によって解き放とうする挑戦的な研究たり得ている。

「死者の書」や「身毒丸」などの折口の〈虚構〉作品がこれらの〈折口像〉の書き換えを通して、折口の個人史や性的（そしてあるいは都市民的）なアイデンティティの虚構化と国文学・民俗学研究の実践の場を併せ持った作品であると位置づけられるのも、これまでの研究には見られない斬新な特徴である。折口のテクストと説教や和歌など古典文学の典拠との関係を正確に捉え解釈する手際にも隙がない。

本論文の文体は重厚で論理構成も堅牢だが、脱字が散見されるなど細部においては改善の余地がある。〈折口像〉という受容史の記述が折口文学の固有性の解明を妨げている面があることも否めないが、これらは本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するのにふさわしいものと判断した。